

雪椿通信

NOM
NOM



企画の視点：「あふれる詩心—版画と陶芸」	P2-3
展覧会予告：阿部展也の多面性に迫る	P4
所蔵品紹介：イコン《キリストの復活と十二大祭》	P5
あしあと：教育普及活動報告	P6
アートボランティア通信：キャンドルナイトを終えて	P7
イベント情報(平成21年10~22年3月)	P8
利用案内／ショップ&レストラン情報／万代島美術館情報	P8
表紙作品解説	P8

②

●企画の視点

「あふれる詩心—版画と陶芸—川上澄生／棟方志功／齋藤三郎」

川上澄生の静かな世界

川上澄生（1895–1972）という版画家について、民芸運動の指導者であった柳宗悦が記した文章が残っている。「川上澄生君の画業は、日本の版画界では最も尊重るべきものの一つである。今日まで少数の人々にはこの事実をよく知りぬいているのであるが、川上君は世間的な名声などとは縁なく、静かに一人歩いているため、今日迄充分にその値打を知る人が少い。」（『川上澄生版画展』小冊子、1956年）世間的な名声とは縁なく、静かに歩みつづける作家というこの川上のイメージは、ある意味では現在もなおあてはまるのではないだろうか。

川上は大正期から昭和期にかけて、南蛮文化や文明開化をテーマとして独自の世界を創り上げ、近代日本版画史に類例のない珠玉の作品群を残した作家である。一点一点に手彩色を施した温もりのある画面が特色となっている。生地の横浜で、今年開港150周年を記念する「川上澄生展」が開催されたのをはじめ、没後数多くの回顧展が企画されているが、その穏やかなイメージは些かも損なわれることがない。

今回の展覧会では彼の画業を振り返り、その誠実な作風を作家ゆかりの新潟県内で紹介することを目的の一つとしている。また同じく版画家である棟方志功（1903–1975）の作品や、上越高田の陶芸家齋藤三郎（1913–1981）の作品を合わせて展観し、版画と陶芸というジャンルにも親んでいただく機会となればと考えている。

川上澄生と新潟

川上澄生と新潟の地との間に幾つかの縁があったことは一般にはそれほど知られていない。「私は明治二十八年四月十日横浜市に生まれた。祖父は越後高田の藩士川上直本と言った。即ち祖父までは武士であった」（『工芸』96号、昭和14年）と自ら綴っている。祖父の代で東京に移ったので、川上自身は新潟に住んだ経験はない。しかし、父祖の墓が高田に残っており、また新井に嫁いだ伯母から特に可愛がられて、若い時代に訪れた懐かしい思い出があったという。子供の頃の幸福な記憶は、作家の心を温かく育む糧となり、長じて詩情あふれる作品を創り出す力となったことだろう。

また川上と新潟を結ぶもう一つの重要な関係がある。柏崎の呉服商吉田正太郎は、1935年に出版された川上澄生の絵本『ゑげすいは人物』の作風にひかれ、川上に作品を依頼する手紙を書いている。以後1971年に吉田が亡くなるまで、35年余りの長きにわたって両者の交遊が続き、400件にも及ぶ川上作品と膨大な量の書簡が吉田のもとにもたらされた。双方の友情の証は、1995年に柏崎市制50周年記念事業の一環として創立された博物館「黒船館」のコレクションとして公開されて今日に至っている。



川上澄生《ローマ字 初夏の風》1926年 財団法人黒船館

棟方志功との出会い

棟方志功が、画家を目指して青森から上京し修行していた時代に、川上澄生の代表作《初夏の風》（1926年）と出会って衝撃を受け、版画家に転向したというエピソードはあまりにも有名である。「いつかの国展に先人川上澄生氏の『はつなつの風』を観て、技が版画に潜そむ詩を聞えた。自分のは板に盛られた色具が和紙にしみ込む、その言葉を版画の好果にもとめ様ふ、版画全体に生れる力を聞かう、版画でその物語りを見ようとした。……それが正直な自分の版画を創くる源であった。」（棟方志功『星座の花嫁』1931年）処女出版となった版画集『星座の花嫁』では、画中に「先を行く人じゃまです」という強烈な言葉を彫り込んでいる。川上の作品に胸を打たれつつも、自己の道を切り拓こうと奮闘する棟方の姿が浮かび上がってくる。

棟方は、その後《大和し美し》で川上色を完全に脱し、戦後は国内外に名を轟かす存在へと目覚ましい成長を遂げた。静と動の対照的な作風を示すことになる2人の歩みを、今回改めて展覧会を通してたしかめる試みは興味深いことだと考える。



棟方志功《星座の花嫁》より〈貴女行路〉 1931年 南砺市立福光美術館



斎藤三郎《辰砂葡萄文大壺》昭和50年代後半
新潟県立近代美術館・万代島美術館

斎藤三郎による2つの版画展

最後に、新潟の地で版画と陶芸を組み合わせた三人展を開催する意味について触れておきたい。かつて第二次大戦直後の上越高田の町では、物資のない厳しい時代にも拘わらず、稀に見る豊かな芸術活動が行われていたことが知られている。その中心人物の一人、斎藤三郎は、椿や唐辛子など身近なモチーフを器に絵付けした親しみやすい作風の陶芸家である。当時、高田の斎藤の工房は疎開中の文化人や芸術家が集う文化サロンのような空間を形成していた。その中に棟方志功の姿があったことを多くの人が記憶している。斎藤が富本憲吉の弟子であった戦前に棟方志功の知遇を得て、棟方が大戦中に富山県福光に疎開したことから両者の交流が深まったのである。1951年には斎藤の働きかけにより高田市立図書館で棟方の個展が開かれた。面白いことに、その5年後にやはり斎藤の尽力で、川上澄生の個展が同会場で開催されている。斎藤がこの2人の版画家を選んだことに特別な事情があったか否か今のところ明らかでないが、版画と陶芸という分野を超えて、作家たちが新潟に往来していた自由な空気、精神的な復興への気運を象徴するような出来事である。このたびの展覧会では、初めて三者の作品が一堂に会すことになる。展覧会のもう一つの見所として、この戦後新潟の芸術家交流史の一端を加えたいと思う。

(学芸課長代理 平石昌子)



高田の斎藤三郎の工房にて絵付けする川上澄生
(右から斎藤三郎、吉田正太郎、桑山太市、川上澄生) 1956年



棟方志功《錦溪頌》より〈倭楼〉 1945年 雪梁舎美術館寄託

「あふれる詩心ー版画と陶芸」展

- 会期 / 2009年11月21日㈯～2010年1月24日㈰
- 休館日 / 月曜日(ただし、11月23日㈪と1月11日㈪は開館し、11月24日㈫と1月12日㈫は休館します)
- 年末年始(12月28日～1月4日))
- 開館時間 / 9:00～17:00
- ※観覧券の販売は閉館30分前まで
- 観覧料 / 一般 当日700円(500円)
大高生 当日500円(300円)
- ※中学生以下は無料
- ※()内は20名以上の団体料金
- ※障害者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示ください)

●展覧会予告

阿部展也の多面性に迫る

瀧口修造との共作『妖精の距離』などで知られる阿部展也（本名・芳文）は、1913年に新潟県中蒲原郡五泉町（現在の五泉市）に生まれ、その後は世界各地を飛び回り、1971年にローマで客死しました。

絵を描くのが好きで画家を目指し、中学を中退後、独学で絵を学んだ阿部は、19歳の時に「第二回独立美術展」に入選します。これを契機に、翌1934年に「一九四〇年協会」を結成すると、続いて「アヴァン・ギャルド芸術家クラブ」に参加、糸園和三郎、北脇昇らと「創紀美術協会」を、さらに福沢一郎らと「美術文化協会」を立て続けに結成するなど、当初より“前衛芸術”を目指して積極的な活動を展開しました。

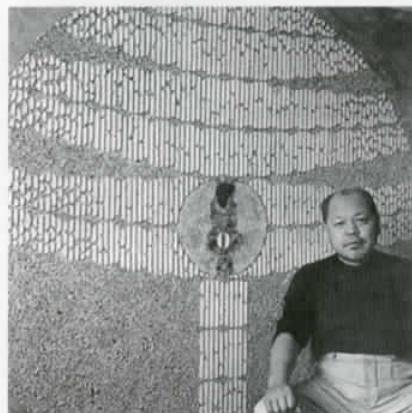
その一方で、同居していた写真機店を営む叔父の影響からか、はたまた阿部を早くから評価した瀧口修造の勧めからか、写真制作にも同時期より取り組み始めます。1938年には瀧口をはじめ、濱谷浩、小石清らと「前衛写真協会」（のちに「写真造型研究会」と改名）を結成し、以降、多くの写真展に出品を重ねてきました。1939年にはフォトタイムス社の特派員として大陸に渡り、また戦時中は、自ら志願して日本陸軍報道部の写真班員としてフィリピンに従軍するなど、カメラマンとしての手腕を発揮しました。

阿部は戦後も前衛写真について多くの論評を残していますが、レンズの眼はむしろ、彼が情熱を傾けた中東欧の建築や墓石彫刻、また旅先のインドで魅せられた人々の姿などに向けられました。その後、これらの調査・研究は彼のライフワークとなると同時に、独自の芸術理論形成の源となっていました。土方定一が1974年の回顧展カタログに寄せた「この作家は美術史研究ではなく、東欧の美術史の「発掘」に自己を賭けはじめた」という言葉が端的に示すように、ロマネスクの墓石彫刻や東欧のセセッションに関する洞察は、それまでにない新しいアプローチと見解を兆していました。

文才と話術に長け、独自の調査・研究に裏付けられた芸術論を展開した阿部は、戦後、弱冠30代にして「日本アヴァンギャルド美術家クラブ」の幹事や「日本美術家連盟」の常任理事に次々と就任します。また、フィリピンで鍛えた英語力を活かして国際舞台へと活躍の場を広



図1 阿部展也《予言者》1954年



阿部展也（1913-71）
制作途中の《ECHO GRAY》（1964）の前で

げると、「国際形造芸術連盟（IAPA）」の執行委員や「グッゲンハイム国際展」の選考委員などの重要なポストに抜擢され、日本の作家を海外に紹介しました。こうした政治的役割を堂々とこなせる芸術家は、当時それほど多くなかったのでしょう。また、62年にイタリアに移住してからは、現地の若い作家たちのリーダー的存在として信頼と人脈を築き、両国の現代美術の架け橋となっていきます。その成果として、故郷・新潟には60年代を代表するイタリア美術の名品が今も残されているのです。

以上の概略からもおわかりのように、画家・阿部展也は彼のもっとも知られた顔ではありますが、あくまでも一面に過ぎません。本展では、当館と新潟市美術館の所蔵品を中心に、彼の多彩な才能を交流のあった作家たちの作品とともにご紹介したいと考えています。

（主任学芸員 濱田真由美）



図2 阿部展也《R-8》1965年

「マルチ・アーティスト 阿部展也」

- 会期／2010年2月16日㈫～3月28日㈰ 月曜日休館
- 開館時間／9:00～17:00
(観覧券の販売は閉館30分前まで)
- 観覧料／一般600円(400円)
大学・高校生400円(200円)
- ※中学生以下は無料
- ※()内は20名以上の団体料金
- ※障害者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示ください)
- 関連イベント
美術鑑賞講座「阿部展也とその周辺」
2010年2月27日㈯午後2時～当館講堂にて

●所蔵品紹介

イコン 《キリストの復活と十二大祭》 19世紀

あまり広く知られてはいませんが、新潟県立近代美術館・万代島美術館では、ロシア・イコンの作品も3点所蔵しています。どのような経緯でコレクションに加わったのかといいますと、いずれも新潟出身のグラフィック・デザイナーである亀倉雄策のコレクションだったもので、これが氏の没後の1998年、ご遺族から新潟県に寄贈され、美術館の所蔵となったのです。

ただ、これらを展示したのは、1999年に近代美術館で開催した「デザイナー・亀倉雄策展」、2008年に万代島美術館で開催した「美術の森」の2回のみでしたので、この『雪椿通信』で初めてロシア・イコンの存在を知る方もいらっしゃるかも知れません。

そもそもイコンとは、主として東方正教の文化圏において発達した礼拝用の画像で、テンペラ画の技法で描かれた板絵の形式が一般的です。英語読みをすれば「アイコン」で、まさにパソコンのデスクトップに貼ってあるものと同じです。パソコンでアイコンをクリックすると本体であるアプリケーション・ソフトが起動するのと同様に、東方正教圏では、神の似姿であるイコンを通して神そのものを観想するのです。もっともこの例えは車近すぎて信者の方には怒られるかも知れませんが。

中世ロシアにはビザンティン帝国からイコンが伝わり、やがてはビザンティン美術を土台としてアンドレイ・ルブリョーフらが独自の様式を確立していきます。17世紀以降、近代化・西欧化にともないイコンは美術史の表舞台からは消えていきますが、その後もロシアでは民衆の信仰の対象として大量のイコンが制作されました。昔のロシアの家庭には、日本の神棚のように、イコンをまつた「赤い隅」(クラスヌイ・ウゴリ)と呼ばれる一角があり、文学作品においても、例えばドストエフスキイの『罪と罰』の

金貸しの老婆の家の描写として、「片隅には、あまり大きくない聖像の前に、灯明が一つもって…」という下りがあります。

亀倉雄策がこれらのイコンを購入したのは1979年のことで、当時積極的にソ連や東欧の美術を紹介していた銀座の画廊・月光荘から入手しています。冷戦真っ只中の1970年代、当時のソ連政府は、「西側」諸国の機械や工業製品の購入のために、国営商社「ノヴォエクスポート」などを通じて18~19世紀のイコンを「西側」諸国に輸出することで外貨獲得を狙っていたこともあり、そんな経緯で1970年代の日本や西ドイツに大量のイコンが入って来たのです。

3点のイコンのうち《キリストの復活と十二大祭》(図1)を見てみましょう。画面中央には「キリストの復活」が配され、その周辺には正教会の十二大祭(12の主要な祭礼)に対応する12の場面が配されています。「キリストの復活」は復活大祭に対応するもので、正教会の最も重要な祭礼であるために、中央に置かれています。玉川大学教育博物館、西田美術館(富山県上市町)、金沢美術工芸大学にも同じ構図のイコンが所蔵されていますが、実際このタイプのイコンは、18~19世紀のロシアでは教会というよりはむしろ個人宅での礼拝用に大量に制作されたようです。

中央に配された「キリストの復活」は、上段に「墓から立ち上がるキリスト」、下段に「冥府降下」(黄泉に下るキリスト)という二つの図像の組み合わせで構成されています。長らくビザンティン世界・東方正教文化圏では「キリストの復活」の表現として「冥府降下」の図像のみを採用していましたが、17世紀の近代化・西欧化の波の中、オランダを中心とする西欧美術の影響が加わり、以降このような上下併置の形式が一般的になっていくのです。

このイコンについては、大阪市立大学で開催された日本ビザンツ学会で発表し、さらに今度玉川大学教育博物館で開催するイコン展の図録論文でも触れましたので、新潟県立近代美術館にイコンのコレクションがあることが全国的にも知られるようになっていくでしょう。

また、この作品については『新潟県立近代美術館研究紀要』の第8号にも詳細な論考を載せましたので、さらに詳しく知りたい方は研究紀要をご覧いただければと思います。《聖ソフィア》(図2)、《カザンの聖母》(図3)についても、これから研究を重ね、その成果を積極的に発表していきたいと思います。

(主任学芸員 高晟塁)



図1 《キリストの復活と十二大祭》 19世紀



図2 《聖ソフィア》 18世紀



図3 《カザンの聖母》 19世紀

新たな「出前講座」の取組と常設展アート体験コーナー



出前講座 ワークショップ「マティスの切り絵に迫る」

平成21年度の教育普及活動では、これまでの美術鑑賞講座、作品解説会、ワークショップ、映画鑑賞会等に加えて、新たに「出前講座」を行っています。これは、美術館や作品鑑賞等にかかる理解を深めるため、市町村、公民館、町内会、PTA、幼稚園・保育園、学校等が主催する講座に、当館学芸員等を講師として派遣し、美術鑑賞講座やワークショップを行うものです。

美術鑑賞講座では、これまで行った講座から厳選したものを、プログラムとして用意しています。地域の作家にかかる内容や所蔵品の作品解説を中心とした内容です。美術作品や作家理解、美術鑑賞の新たな視点として役立てていただけると思います。今年度は次の6講座です。「三芳悌吉と絵本」、「横山操と新潟」、「佐渡の人間国宝 三浦小平二」、「長岡出身の洋画家 小山正太郎」、「砂浜を描いた洋画家 國領經郎」、「岩田正巳と新興大和絵の画家たち」。

ワークショップでは、これまでしてきたものの中から、館外で簡単にできる内容のものを選んでいます。今年度は、次の4つです。「マティスの切り絵に迫る」、「やってみよう ロダンのポーズ ロダン体操」、「現代アートを体験 形と色の組み合わせ」、「どこでもアート つんで、ならべて」。

これまで、予定も含めて、美術鑑賞講座に4件、ワークショップに7件の申込みがありました。依頼先は、小・中・高等学校、教員研修、市民公開講座、高齢者教育講座、PTA主催体験コーナー等で、方面も上・中・下越と県内各地に及んでいます。参加された皆さん、興味をもって取り組まれ、喜んでいただいています。ワークショップに参加した小学校からは、夏休みに美術館で開催した「こどもアートミュージアム」に出品していただき、「家族で見に行った子もいました」という連絡をいただきました。出前講座によって、美術館との新たなかかわりが生まれてきています。

常設展示室のロビーでは、来館された皆様が簡単に創作できる「アート体験コーナー」を設けています。所蔵作品のジグソーパズルやぬり絵、展示作品の表現に関連する創作などです。前回の常設展「現代美術のクラシック」では、阿部展也《太郎》と岡本太郎《顔》のぬり絵で、1,000点を超える作品が集まりました。また、細長い色画用紙片を編むなど、色と形の組み合わせを生かした作品は、展示コーナーに飾りきれないほどできました。

創作に興味と意欲をおもちの方が、大勢いらっしゃることが改めてわかりました。アンケートには、「中学生の時以来、久しぶりに工作（美術）を体験できて楽しかったです」「ぬり絵と短冊のワークショップは面白く勉強になりました」などの感想がありました。これからも、皆様に楽しんでいただけるよう、鑑賞と結び付いた体験コーナーづくりに取り組んでまいります。

（学芸課長代理 立川厚生）



アート体験コーナー
「阿部展也《太郎》と岡本太郎《顔》のぬり絵に挑戦」



アート体験コーナー「色を組み合わせて素敵な模様に！」



キャンドルをセットするアートボランティアの皆さん

6月21日(日)夏至の日に、アートフェスタNEO²のオープニングイベントとして、キャンドルナイト@kinbiを実施しました。

全国的に実施されている、夏至前後の「100万人のキャンドルナイト」の一環として、今回のキャンドルナイトを実施する。アートボランティアのアイディアを最大限に生かした内容にする。この2点に重点を置いて、今回のイベントを実施しました。

5月上旬に第1回企画会議を行い、その後2回の会議を行いました。しかし、経験者がほとんどおらず、また準備日数が限られている中で、コンセプトをどうするか、どのような内容にするか、アートボランティアと美術館担当者で議論を重ねました。

その結果、①できるだけ多くの方に見てもらうために美術館隣りの千秋が原ふるさとの森内「花の広場」を会場とする。ただし、雨が降った場合は、連絡通路スカイウェーとアトリウムとする。②点火するキャンドルは1,000個とし、600個のキャンドルホルダーは長岡コンベンションセンターから借り、残る400個は市内の小学生から絵を描いてもらう。③1時間程度のミニコンサートを行い、五十嵐幸子さんのオカリナ・フルート演奏と、畠山徳雄さんのギター・深田栄廣さんのピアノ、深田美恵子さんのシンセサイザー演奏とする。としました。

当日の朝は雨で、雨天案かと思われましたが、その後急に天候が回復し、すべてのイベントを「花の広場」で行うことができました。

今回のキャンドルナイトを実施するにあたり、神田小学校・大島小学校・新町小学校・表町小学校・中島小学校・上組小学校の皆さん、長岡緑地環境協同組合の皆さん、そして企画・準備・後片付けに至るまでご協力いただいたアートボランティア・美術館友の会の皆さんに改めて感謝申し上げます。

(主任学芸員 佐藤克己)

近代美術館キャンドルナイトの夜

アートボランティア 山崎豊士

5月にキャンドルナイトの企画の相談を頂きました。私は、「スキー場やクリスマスでもないのに?」と思いつつ最初の企画会議に参加しました。美術館というこれまで象牙の塔と思っていた施設で、ボランティアの発想を主体に企画を進めると担当者から提案され、驚くとともにうれし

くもありました。会議では、実施内容が次のように決まりました。

- 1 「花の広場」を会場にする。
- 2 ミニコンサートをする。
- 3 市内の小学校の協力を得る。

今回、私はミニコンサートを担当しました。ギタリスト畠山徳雄氏との出演交渉、音響機器の手配、当日の司会を行いました。

五十嵐幸子さんのオカリナとフルート演奏は独奏で、蛙の声が共鳴して幻想的でした。畠山氏の演奏の途中、アドリブで私が島崎藤村の「初恋」の朗誦を入れたところ、彼は即興でギター伴奏を付けました。

奏者も楽器も「花の広場」の景観に溶け込み、すばらしいミニコンサートとなりました。また、蠟燭のゆらめく光で花壇の蝶の姿が浮かび上がり、これ以上はない会場でのキャンドルナイトになりました。

ボランティアの発案を尊重してくださった近代美術館の度量に、改めて感謝をしています。



夕暮れに灯るキャンドル

達成感のあったキャンドルナイト

アートボランティア 金子明子

初めてのキャンドルナイトの企画が5月上旬に示されました。日程も迫り、全員手探り状態で話し合いが行われ、担当者の緊張が伝わってきました。

「私にできることは何だろう?」「当日、人は来てくれるだろうか?このことを知人に話し、大勢の方を誘ってみよう。」「できればミニコンサートのようなものが欲しい。ギタリストの畠山さんと親しくしている人に尋ねてみよう。」

そんな不安や期待を胸に抱きながら、3回の会議を経て、キャンドルナイト当日を迎えるました。

夏至の6月21日当日、近代美術館に隣接する花の広場は、1,000本のキャンドルの灯りが揺れ、オカリナとフルートの演奏、ギターとピアノ・シンセサイザーのハーモニーが会場全体にすばらしい音色を響かせていました。

当日は、キャンドルホルダーの絵を依頼した小学生が現地で点火する姿が印象的でした。さらに、後日の新聞で600人の人出があったと報じられていました。

今回のキャンドルナイトは、結果が目に見える達成感のあるボランティア活動でした。そして、この夏の楽しかった思い出の1つとなりました。

MUSEUM INFORMATION

開館時間

- ▶午前9時～午後5時
※11月3日までの企画展開催中の毎週金曜日は午後6時30分まで開館します
- ※観覧券の販売は閉館30分前まで
- ▶レストラン／午前10時～閉館時間まで
※ラストオーダー [食事]閉館1時間前まで
[飲物]閉館30分前まで
- ▶ミュージアムショップ／午前9時～閉館時間まで

休館日

- ▶毎週月曜日
※月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館します
- ※保守点検・展示替え・年末年始のため下記の各期間は休館します
11月16日(月)～18日(水)、12月28日(月)～1月4日(月)、
2月8日(月)～10日(水)
※都合により、臨時休館する場合があります
- ▶月曜開館
10月26日、11月2・23日、1月11日、3月22日

観覧料金

- ▶企画展
企画展によって観覧料が異なります
小学・中学・中等教育（前期）は年中無料です
なお、企画展の観覧料で、常設展もご覧になれます
- ▶常設展（展示室1・2・3）※土田麦僕展・市展開催期間は展示室1を除く）
 - 一般／420円（340円）
 - 中等教育（後期）・高校・高等専門・大学／200円（160円）
※学生証をご提示ください
 - 小学・中学・中等教育（前期）／無料
※（ ）内は20名以上の団体料金
 - ※障害者手帳をお持ちの方は無料
(受付にて手帳をご提示ください)

展示会情報（10月～3月）

- ▶企画展
9/19(土)～11/3(火) 土田麦僕——近代日本画の理想を求めて
11/21(土)～1/24(日) あふれる詩心——版画と陶芸 川上澄生
・棟方志功・齋藤三郎
2/16(火)～3/28(土) マルチ・アーティスト 阿部展也
- ▶常設展
9/19(土)～11/15(日) 西洋の魅力を探る旅—モネ、ロダンからピカソまで
11/19(木)～2/7(日) コルヴィッツとバルラッハの版画
2/11(木)～4/11(日) 佐々木象堂と新潟の金工
- ▶共催展
11/11(水)～11/15(日) 長岡市展
1/29(金)～2/7(日) 新潟県ジュニア美術展覧会「長岡展」

イベント情報

- ▶ワークショップ（参加無料／エントランス集合／午後2時～）
11/1(日) 落ち葉をあつめてカラフル・アート
(要事前申込み10/23まで)
- ▶美術鑑賞講座（聴講無料／講堂／午後2時～）
10/24(土) 「昭和期の麦僕—古典美の追求と朝鮮」
(近代美術館主任学芸員 長嶋圭哉)
- 11/28(土) 「詩心あふれる芸術家たち」
(近代美術館学芸課長代理 平石昌子)
- 12/5(土) 「コルヴィッツとバルラッハ 共鳴する精神」
(万代島美術館業務課長 桐原浩)
- 2/27(土) 「阿部展也とその周辺」
(近代美術館主任学芸員 濱田真由美)
- 3/20(土) 「新潟の金工 佐々木象堂と佐渡・柏崎の作家たち」
(近代美術館学芸課長 藤田裕彦)
- ▶映画鑑賞会（参加無料／講堂／午前11時～、午後14時～）
12/12(土) 「彫る・棟方志功の世界」(1975年)

万代島美術館情報

◇ジブリの絵職人 男鹿和雄展

9月19日(土)～11月29日(日)

◇所蔵品展

松永眞のデザインと亀倉雄策賞の10年

12月12日(土)～2月14日(日)

◇所蔵品展

花鳥風月—現代日本画にみる自然の美

The Niigata Bandaijima Art Museum

新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市中央区万代島5-1

(朱雀メッセ内 万代島ビル5F)

TEL025-290-6655 FAX025-249-7577

<http://www.lalanet.gr.jp/banbi/>



「となりのトトロ」背景画(1988年)

©1988二馬力・G

ミュージアムショップ KINBI より

〈おすすめ商品のご案内〉

お待たせ致しました！！

2010年アートカレンダーが今年も入荷しました☆
数に限りがございますので、
どうぞお早めに…。



■ミュージアムショップ KINBI TEL0258-28-2200

レストラン 広告塔 より

〈人気メニューのご案内〉

人気の石焼ビビンバ、和洋中の創作料理『気まぐれランチ』をはじめ、11月4日から、秋メニューとして鶏のけんちん庵かけ丼、焼きカレー等、温かいメニューをご用意してお待ち致しております。



鶏けんちん庵かけ丼¥980

■レストラン 広告塔 TEL0258-29-5001

①青木野枝《亀池・蓮池》1997年

②小清水漸《空へ、信濃川から》1995年

当館の周りに1995年と1997年に設置されて以来、行き交う人々に親しまれている野外彫刻。その中から2点を紹介します。さて青木野枝《亀池・蓮池》です。作者の作品の多くが《無題》であることを考えると、こんな題名がついた本作は珍しいのですが、実は睡蓮が浮かぶ池の中から亀が出てきたところをまたま目撃した作者が、その亀と目があったことから発想された作品なので、こんなタイトルがついたそうです。作者は中が見通せない寒天のような泥池に惹かれて、まさに地上の蓮池を作り上げたようです。一方、小清水漸の《空へ、信濃川から》も具体的なタイトルですが、設置場所を訪れた作者が、信濃川に思いを馳せ、雄大に流れる信濃川の水の流れを取り込んで、「広い空に船出するような伸びやかな気分」を表現した作品であると述べています。よくみると、普通の舟とは逆に、舟の中に水がいっぱいにはらっています。でもお魚が地上を旅する時はこんな舟になるのかもしれません。人も宇宙へ行くときは、舟に空気をいっぱいに詰めていきますから。

新潟県立近代美術館便り 雪椿通信 第33号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL.0258-28-4111 FAX.0258-28-4115

<http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 北越印刷株式会社

〒940-0034 長岡市福住1丁目6-27 TEL(0258)33-0306代

発行日 2009年10月20日